

平和を願う「回天」記念碑

〈表面からのつぎぎ〉

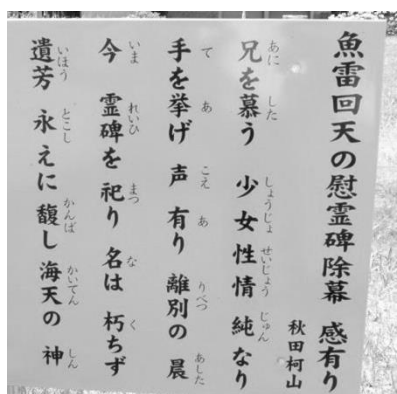
「回天」記念碑は、白御影石製で高さ約2.2メートル、幅約1.8メートル。白井田出身の画家・難波平人さん（広島大名誉教授）が監修し、難波さんの長男で彫刻家の難波章人さんがデザイン。石材加工は、上関町内で石材店を営む柏田真一さんが担当されました。

デザインの意図としては、「全体の形として、兄と妹の二人が離別を惜しんで手を取り合う「愛」を表現し、側部には海の表情を取り込み、台座にも波を刻み、上部は思いが空に向かつていく感じにしました。安らかなる眠りのために丸い出口を作り、そこから周防灘の海が見えるようにしました。」とのこと。



丸い出口からは海が見える

今年7月、記念碑のすべそばに「魚雷回天の慰霊碑除幕 感有り」という詩の看板が設置されました。この詩の作者である秋田博さん（読売新聞社友）は、白井田の出身で、漂着した回天の第一発見者の一人だそうです。若菜さんとも面識があり、記念碑の除幕式に出席されたときの感動を詩にされたそうです。



◎「回天」について

「回天」は「人間魚雷」とも呼ばれています。旧日本海軍の超大型魚雷を改造した1人乗りの特攻兵器で、全長は約15メートル、直径約1メートル、中央部に操舵室を取り付けて、先端部にはおよそ1.5トンの爆薬を積載することができました。回天は潜水艦に搭載されて出撃し、海中で発射、乗員が操縦して敵の艦船に体当たりします。命中すれば一撃で戦艦さえも撃沈する威力を持っていました。

脱出装置が無く、後進もできないため、発射されれば乗員は必ず死んでしまうことから、当初は開発の許可が下りなかったようですが、戦況の悪化によって終戦前年の1944年（昭和19年）2月に開発許可が下り、同年8月に正式兵器として採用されました。「天を回らし、戦局を逆転させる」という意味で「回天」と名づけられました。



「回天」の実物大の模型（平生町阿多田交流館）

回天の訓練基地は同年9月に山口県の徳山湾に浮かぶ大津島（現・周南市大津島）に開設されました。まもなく同じ山口県の周防灘に面した光（現・光市光井）と平生（現・平生町田名）、そして大分県の別府湾に面した大神（おおが：現・大分県速見郡日出町）にも設けられました。終戦までに訓練を受けた回天搭乗員は、1375人に及びました。年齢は17歳〜28歳で、大多数は20歳前後の若者でした。回天による戦没者は、出撃戦死者87名、訓練中の殉

職者15名、終戦により自決2名。整備員などの関係者も含めると合計で145名になります。

◎回天ゆかりの地

回天の訓練基地のあった地域には、現在は慰霊碑や記念館などの関連施設が建てられています。山口県内3か所の回天ゆかりの地を紹介します。

《周南市大津島》

回天の発射場跡や、回天をトロッコで運んだトンネルなど、回天の訓練基地跡が今も残されています。「回天記念館」には



回天の発射訓練基地跡

回天に関する遺品・遺書の展示を中心に、回天の歴史や時代の背景、当時の生活などがパネル展示で紹介されています。回天記念館の門から入口まで、両側に並ぶ石碑のひとつひとつには、回天による戦没者145名の名前と出身地が記されています。

【回天記念館】開館時間 8:30〜16:30
／休館日 毎週水曜日および年末年始
／入館料 大人300円／電話 0834-85-2310

《平生町田名》

かつて回天訓練基地のあった阿多田半島には、現在は平生港田名埠頭が建設されています。2004年に埠頭の入り口付近に「阿多田交流館」が開設され、阿多田半島の歴史資料



田名埠頭の近くにある「回天碑」

と共に、回天に関する遺品や資料も数多く展示されています。阿多田交流館から少し離れた場所に「回天碑」が建てられています。

【阿多田交流館】開館時間 9:00〜16:00
／休館日 毎週月曜日および年末年始
／入館料 無料／電話 0820-56-1100

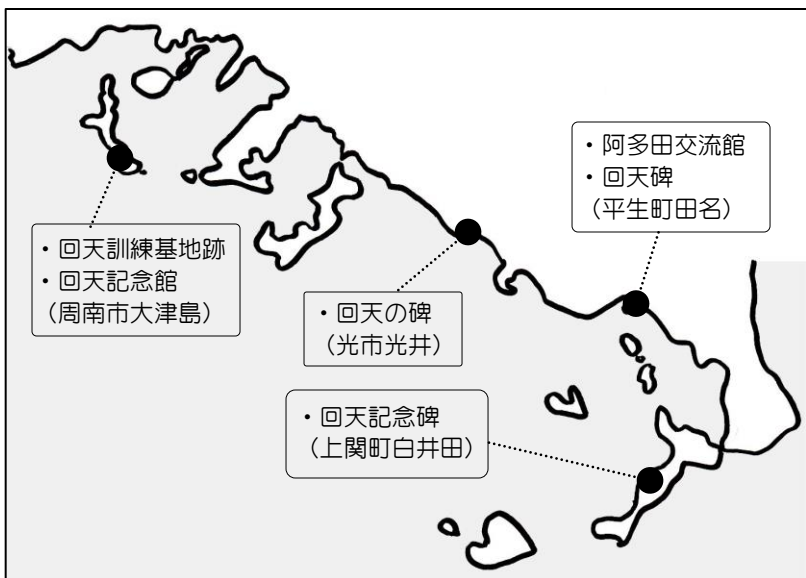
《光市光井》

回天訓練基地のあった光井港に「回天の碑」が建てられています。この碑は、戦没者を慰霊するために有志の皆さんが建てられたもので、「わたしたちは祈るあなたたちの御魂が、ふるさと光に安らぐことを。わたしたちは誓う。未来の子どもたちへ。平和の志を、確かに伝えること」と刻まれています。



光井港にある「回天の碑」

『回天』ゆかりの地マップ



◎「わいわいタイムス」9月号は9月1日（日）発行予定です。